

NIEや多様な言語活動を通して 自身の将来や学ぶ意味を考究する

山口県立下関南高校の課題は、「そこそこ志向」の生徒たちに明確な進路意識と高い目標を持たせること。

新聞を通して教科の学習内容と社会のつながりに気づかせるNIE、
進路選択の前提となる「考える力」を養う探究活動や言語活動、

自身の内面を深掘りさせる面談など、多様なアプローチで進路意識の向上を図っている。

殻を破り、自ら考え 行動する生徒を育てたい

山口県立下関南高校は、例年50〜70人が国公立大学に合格する単位制普通高校である。今でこそコンスタントに進路実績を上げる同校だが、10年ほど前には、国公立大学合格者が40人を切り、合格率が20%を割り込んだ時期があった。そこで同校は、2008年に進路指導部長になった松村成通先生を中心に、それまでの推薦・AO入試を含めた多様な入試に向かわせる指導から、一般入試を中心に勝負させる指導へとかじを切

る。部活動などの特別活動にも十分に組み、そこで育んだ能力を生かし後期日程まで頑張り抜く生徒の育成へと指導方針を変えた。

「高い潜在能力を持つているのにもかかわらず、目立ちたくないという理由で目標をあえて下げてしまう生徒や、保護者に気を使って県外に出ようとしない生徒が多くいました。そういった生徒の能力を最大限に引き出すためには、十分に自分自身と向き合わせることから始めなければいけません。そして、殻を破り、自ら考え行動する生徒、粘り強く最後まで目標に向かって進む生徒を育成

しようと考えました」(松村先生)

受け身の姿勢は学習への向かい方にも表れている。3学年主任の橋本智子先生は言う。

「生徒は素直で真面目ですが、与えられた課題以上の学習に取り組むことはあまりありません。3か月後、半年後にどうなっていたのか、そのために今何をすべきかという見通しをもって学習計画を立てることがなかなかできません。特に中学時に塾を中心に試験対策をしてきた生徒は、勉強の仕方が分からず、自分が本当に理解しているのかどうかすら確認できないという生徒も少なくあ

りませんでした」

生徒の志を高めるための進路講演会や合格者講話(卒業生の受験体験談)、切磋琢磨する雰囲気醸成する勉強合宿などの新たな取り組みを次々と導入する一方、生徒の意識を途切れさせないように、それらの実施時期にも気を配った。例えば、1年次の夏季休業直前、緊張が途切れるタイミングを見計らって大学・企業訪問を入れた。弛緩した雰囲気になりやすい2年次2学期の修学旅行前には、進路講演会や学部・学科研究のワークショップを設けて将来と向き合わせた。

P T A 進路講演会や保護者ガイダンスでは、生徒と保護者が一緒に、外部講師から教科の学びや将来の職業につながる講話を聞く。「本校の生徒は、『進学すると、親に経済的な負担をかけることになるかもしれない』『自宅通学できる範囲で志望校を選んだ方がよいのではないか』などと、保護者にとっても気を使います。保護者にも学校の方針や大学・社会の現実を知っていただくことで、親子が



山口県立下関南高校校長
齋藤嗣夫 さいとう・つくお
教職歴37年。同校に赴任して2年目。「いつも笑顔で」



山口県立下関南高校
松村成通 まつむら・しげみち
教職歴27年。同校に赴任して11年目。進路指導部長。「生徒のために何ができ、何をすべきかを常に考える行動する」



山口県立下関南高校
片山裕子 かたやま・ゆうこ
教職歴21年。同校に赴任して6年目。1学年担任。「自分自身の心身の健康を保つこと」



山口県立下関南高校
橋本智子 はしもと・ともこ
教職歴19年。同校に赴任して12年目。3学年主任。「嫌われることを恐れずに本気でぶつかると」

客観的な情報に基づいて、中・長期的な視野で進路を話し合えるきっかけを与えたいと考えています」と、松村先生はねらいを述べる。

NIEで教科の学びと社会とのつながりを実感

進路行事を充実させる一方、教科学習と社会とのつながりを意識させるために、同校では、新聞を授業に活用するNIE（*）にも取り組んでいる。家庭科では、人口減少や女性の労働、待機児童の問題、食品の

山口県立下関南高校

- 下関市立下関高等学校を前身とし、2016年に創立111年を迎えた。校訓は「日々に磨かん智と徳と」。高大連携や地域ボランティアにも力を入れている。
- 設立 1905（明治38）年
- 形態 全日制・単位制／普通科／共学
- 生徒数 1学年約150人
- 2016年度入試合格実績（現役のみ）
国立大は、信州大、愛知教育大、岡山大、山口大、九州大、長崎大、熊本大、大分大、下関市立大、山口県立大などに73人が合格。私立大は、立命館大、近畿大、関西学院大、広島修道大、西南学院大、福岡大などに延べ164人が合格。
- URL <http://www.minami-h-jyjn21.jp/>

安全など、授業内容に関連する記事を配布して読ませている。教科書で学んだことが実社会でどのように話題になっているのかを確認させ、15分程度で簡単な小論文を書かせることもある。家庭科担当の片山裕子先生は、「授業での学びと実社会の課題を関連づけてほしい」と思い、NIEは初任時から実践しています。新聞を読むことで、教科の学びと社会のつながりを知るだけでなく、自分たちの生活や社会を変えていきたいという志や課題意識を持たせたい」と語る。

松村先生担当の地歴・公民科では、授業で使用するノートとは別に「新聞ノート」を生徒に用意させている。生徒は、気になった新聞記事をノートに貼って重要部分に線を引き、できれば数行のコメントを書いて毎時間先生に提出する（写真1）。先生も時々、コメントを書いて生徒に返す。最初は自分の趣味や好きなスポーツに関する身近なものが多かったが、回数を重ねることに視野が広がり、社会に目を向けた内容が

増え、視点も鋭くなつていくという。橋本先生の英語の授業でも、少数クラスで簡単な英字新聞を読ませ要約し、口頭で発表する取り組みを行った。

進学委員の生徒が執筆・編集を行う「進路通信」にも新聞が使われている。表面は生徒が伝えたい進路情報、裏面は新聞のスクラップで構成されており、裏面では委員の生徒が進路指導室にある新聞から気になる記事を選んで貼り、概要と感想を添

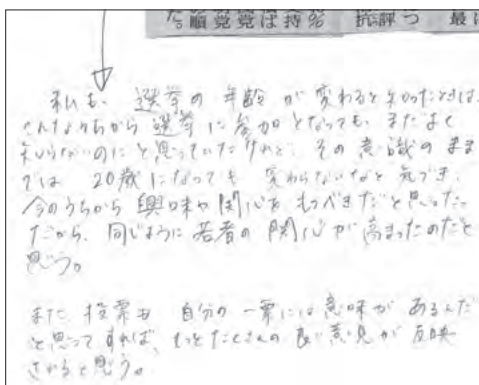


写真1 新たに選挙権を得た18・19歳の選挙の関心度合いについて書かれた記事を読み、自分のあり方を考え、意見を述べている。

* NIE(Newspaper in Education = 「エヌ・アイ・イー」)は、学校などで新聞を教材として活用する学習のこと。

える。齋藤嗣夫校長は、「授業や委員会活動など、様々な活動を通して生徒が新聞になれ親しみ、社会に関心を持つてくれるのは、とてもよいことだと思います。多くの学校で課題となつている主権者教育にもつながることを期待しています」と評価する。

探究活動と言語活動で考える力を育成する

社会とのつながりとともに教師たちが大事にしているのが、教科の学びや進路決定に必要な「考える力」の育成である。

16年度1学年の「総合的な学習の時間」では、課題図書を材料とした探究的な活動を取り入れた。生徒は夏季休業中に学校が推薦する約30冊の課題図書から2冊を選んで読み、そこから探究したいテーマを考える。担任や副担任から、「なぜ、そのテーマにしたのか。何を調べたのか。どうやって深めていくのか」といった指摘やアドバイスを受けながら、テーマを練り上げ、研究の方向性を定めていく。

テーマが決まると、関連する書籍

や新聞にあたって情報を掘り下げていき、探究の結果をレポート用紙3〜5枚にまとめる。あえてインターネットは使わず、複数の書籍や新聞から必要な情報を集めるのが決まりだ。片山先生は、「課題図書の選択やテーマ設定を通して、自分自身の興味・関心が何にあるのかに気づかせ、大学進学目的や学びの意味につなげたいと考えています。興味のあるテーマを深めたり広げたりする方法を学んでおくことは、大学進学の学びにも役立つはずです」と期待を込める。

松村先生が担当する地理では、読書と言語活動を連動させた取り組みを実践している。長期休業中に生徒が地理分野の書籍を選んで読み、その内容を休み明けに原稿用紙3枚分に要約して提出する。後日、松村先生が生徒一人ひとりと面談を行い、2分程度で内容の説明をさせ、何を学んだのかを聞く。例えば、土石流について学んだという生徒に、その場で発生のメカニズムについて問いかけたが、答えられなかったため、面談は後日やり直しとなった。その場で質問されるので、要約の内容の

丸暗記では対応できないのだ。1回で合格する生徒はまれで、ほとんどの生徒が2、3回面談を繰り返すという。

「NIEは、情報や知識を広げることには役立ちますが、それだけでは不十分だと考えています。書籍で知識を深めると同時に、要約や内容説明を通して、自分の得た情報を分かりやすく伝える技術も身につけてほしいと思っています」(松村先生)

生徒主体の面談により進路意識を掘り下げる

生徒の進路意識をより深化させるために、同校では面談を重視している。年間で生徒1人につき3〜5回、机を挟んでの面談が行われる。

多くの教師が心がけているのは、徹底的に生徒に考えさせることだ。片山先生は、生徒が大学選択における「譲れない条件」は何かを考えさせ、そこから適性や興味・関心を引き出していくという。

「生徒が何を望んでいるのか、将来就きたい職業や学びたい学問は何か。留学がしたいのか、資格が取りたいのか。これだけは実現したいこ

とは何かを考えさせ、大学に行く意味を問いかけるようにしています」(片山先生)

松村先生が進路指導部長の立場で行う全員面談も同様だ。松村先生は毎年、2年次2〜3学期と3年次1学期の計2回、すべての生徒と面談を行う。そこで先生は徹底的に生徒の声を聞く。将来何がしたいのか、なぜ、その学部に進学したいのか。生徒が答えやすい聞き方で質問し、メモは取らず、生徒の目をしっかりと見て生徒の気持ちを引き出していく。

「教師がよかれと思ってあれこれとアドバイスしすぎると、生徒はこちらに合わせて自由な発想をしなくなりません。保護者の価値観に縛られている生徒もいるので、せめて私の面談では、自分と向き合う機会を保障したいと考えています」(松村先生)

生徒によつては、担任と松村先生、生徒と保護者の4者面談になることも少なくない。「若手の教師にとつては、松村先生を交えての面談は大きなプレッシャーであり、またない研修の場でもあります。どのよう

に生徒から情報を引き出してアドバイスを与えるのか、若手にとって非

常に勉強になると思います」と、齋藤校長は語る。

生徒と向き合うのは担任の仕事だが、担任が安心して面談に打ち込めるのも、学年団で生徒の情報を共有しているからにほかならない。同校では学年会が時間割の中に組み込まれており、学年団が毎週顔をそろえて生徒の情報を共有している。担任が教科担当から気になる生徒の情報を得て面談の参考にしたり、伸び悩んでいる生徒の支援を教科担当に依頼したりすることで、担任1人が負担を背負い込むことのないように配慮している。また、管理職と学年主任、担任団、進路指導部が一堂に会する進路検討会議を、2学年は1回、3学年は3回行っており、そこで共有した情報が面談に生かされることも少なくない。

試験前日まで粘り強く 進路実現に向かう生徒たち

ここ数年、同校の生徒が受験する大学入試の主流は推薦・AO入試から一般入試へ切り替わった。模試は

3年次の最後まで5教科7科目を受験し、早くから3教科に絞る生徒は1割に満たない。明確な志望動機を持つ生徒が後期入試まで頑張り抜く姿を、教師たちは頼もしく見つめている。

「いったん目標が決まれば、それに向かつて猛進していくのが本校の生徒の素晴らしい点です。本校では基本的に土日も教室を開放しており、特に入試前は教科、小論文、面接、体育や芸術の実技など、個別入試に向けた指導を全教職員で行いますが、試験前日の夜まで指導を受ける生徒たちが見られることは、教師冥利に尽きます」(松村先生)

過去には、看護系の志望者が自主的に集まって、面接対策のための「看護ノート」を作った例もある(写真2)。「どんな看護師になりたいか」「高校生活で得たもの」などを書いて持ち寄り、互いに批評し合ったり励まし合ったりして、自律的に進路実現に向かっていった。

県外に出る生徒も徐々に増えており、大学で顕著な学業成果を上げる

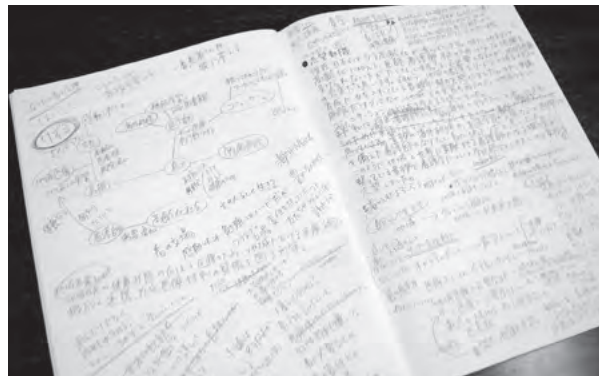


写真2 看護系の志望者が作成した「看護ノート」。細かいメモやマインドマップなどに思考の跡が見える。

卒業生も現れるようになった。当初、地元の公立大学を希望していた女子生徒は、進路指導を通して奮起し、東北の国立大学に合格。実家からの仕送りがほとんどない中で、海外留学やボランティアに積極的に参加し、大学の大使として東欧やアフリカへ派遣されるまでになった。

「大学入学後の大きな飛躍は、在学中に自分の将来を真剣に考えた成果だと思います。自分の好きな学問に打ち込んで、世界中を飛び回る卒業生の活躍が、在校生に勇気を与えています」(松村先生)

もちろん、課題もある。その1つが、組織的な進路指導体制の確立だ。現在は松村先生を始め、ベテランの教師たちが個の力で支えている面がある。次代のリーダーを育てると同時に、誰が携わっても成果を上げられる進路指導の流れをつくり、根づかせていくことが必要だという。

進路意識の成熟度が二極化している点も、課題の1つだ。

「面接指導をしていると、しっかりと志望動機を語れる生徒が確実に増えていることを実感する一方、3年次になっても志望があやふやな生徒の存在にも気がつきます。保護者や友人の意見に安易に流されることなく、大学へ行く意味を明確に、そして自分らしい言葉や文章で表現できる力を育てることが、進学意欲を高め、大学生活を充実させることにつながります。生徒の人生をよりよいものとするための大切な指導として、本校の進路指導をさらに磨き上げていきます」(齋藤校長)